

Title	宮地裕教授を送るにあたって
Author(s)	前田, 富祺
Citation	語文. 1987, 48, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68751">https://hdl.handle.net/11094/68751</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



# 宮地裕教授を送るにあたって

前 田 富 禎

宮地裕先生は、昭和二十五年三月に京都大学文学部を卒業し同大学大学院に進み、京都府立西京大学の助手・講師を経て、昭和三十一年四月には西京大学助教となり。その後、昭和三十一年四月に国立国語研究所第一研究部に移り、研究員・主任研究官を経て、昭和四十年四月には同話しことは研究室となった。そして、昭和四十二年四月には池上禎造先生に招かれて大阪大学文学部に移り、昭和四十九年十一月、池上禎造先生御退官の後を承けて国語学講座の教授となられ、ちょうど二十年のあいだ大阪大学文学部の学部長・大学院学生の教育に尽力されたのである。この間、評議員・文学部長をも務められ、大変な御活躍をされたのである。

宮地裕先生は、研究のスタートから現在に至るまで、現代日本語の研究、特に文法の研究を中心の課題としてこられた。現代日本語の研究が本格的に始められたのは戦後のことであるとも言えようが、宮地裕先生はその先頭をきってこられたのである。宮地裕先生は、それまでの文法研究においても中心的な課題であった助詞・助動詞をあらたなる視点から考え直すとともに、文・文型・敬語・イントネーションなど次々と新しい問題に取り組み、独自の文法論として発展させてきたのである。大阪大学に移られてからは、言語活動・言語表現として総合的に考えるところにも、更に語構成の研究へと進み、次々と優れた論考を発表して、我々を裨益すること大なるものがあつた。ちなみに言えば、宮地裕先生の学位論文の題目は「現代日本語形態論」であつて、昭和四十九年三月二十五日に学位を授与されたのである。実証を重んずれば理論を忘れ、理論を重視すれば実証の面のおろそかになるのが世の常であるのに、宮地裕先生は、一方では理論を深め体系的に整理する姿勢を堅持するとともに、他方では具体的な問題に真正面から取り組み実際の例から出発して考えることを重視され、理論・実証のあいまった研究を続けてきておられる。これらの分野の研究の成果は、早く『文論』（明治書院、昭和四十六年）、『現代表現考』（共文社、昭和四十六年）としてまとめられたところによって窺うことが出来る。その後、『文論』にあらたに論考を加え編集し直した『新版 文論』（明治書院、昭和五十四年）を刊行しており、その研究の理論的・体系的な精緻さと実証的な裏づけの確かさによって学界に与えた影響も大きく、この分野の研究の基本文献として評価されるに至っているのである。

宮地裕先生は、国立国語研究所に移られるところから、文章・文体・語彙・意味関係の問題にも研究の範囲を広げられた。これらの分野の研究においても、「大岡昇平の文章」「対談の文体論的考察試論」「職業とコトバ」と、最初ころの論考の題を挙げてみても窺えるように、

次々と新しい問題を新しい視点から考え続けてこられたのである。もちろん単に新しい問題を考えるというだけではなく、意味論・文章論・言語生活研究のそれぞれの分野の研究がどのように進められてきたかを整理した上で、御自身の考え方を理論的・体系的に述べておられるのである。なお、『新版 文論』には敬語論・文章論に関わる論考は省かれており、それらを合わせてまとめられる予定であるときく。続編の刊行の早からんことが期待されるのである。

近年は、また、成句・慣用句の研究をも進めておられる。成句・慣用句を辞典的に整理したものは従来も多かったが、体系的・実証的に研究したものは少なかつた。宮地裕先生は、成句・慣用句を集め整理するとともに、体系的な研究を試みられ、この分野の研究に今後の指針を示されたのである。御編著である『慣用句の意味と用法』（明治書院、昭和五十七年）は、大阪大学に留学した多くの学生の参加を得て、英語・中国語・韓国語などの慣用句との対照研究という面もあり、まさに宮地裕先生でなくてはまとめられなかったものであり、各方面の注目を集めている。

この他、宮地裕先生は、国語教育・日本語教育の方面にも早くから携わってこられ、実践面での指導をなさるだけでなく、多くの優れた論考を発表されてこの分野の理論的な支柱となつてこられたのである。また、『講座正しい日本語』『作文講座』『講座現代語』『口語文法講座』『講座日本語学』など多くの講座を編集されるとともに、現在も月刊誌『日本語学』の編集の中心となつておられ、長年にわたつて研究の状況を把握し将来の研究の方向を見定め後進の研究者や一般の人々に紹介することに努めてこられたのである。

宮地先生という、まず活動的なお姿が思い浮かべられる。面倒な事務的な仕事をテキパキと片付け、難しい折衝を次々と電話で処理するなどは、私どもの到底真似の出来ないことである。割切つて考えられ決断が早いので、私など応答に迷っているうちに話がどんどん先に進みとまどうこともあつた。決断も早い行動も早い。大勢の学生とどこかへ行く時も先頭に立つてどンドン先に行つてしまい、私など学生がついて来ているかどうか気になることもあつた。停年を迎えられるとはいうものの、ますます元気で御活躍されている。一層の御健勝と御発展を祈るとともに、今後も私どもをお導き下さることを願つてペンを置きたい。

昭和六十二年二月